巻頭言

母親

外山滋比古

幼稚園の園長をした。そして、一年で辞めた。体調のよくなかったこともあるが、続ける意欲を失って退陣した、というのが本当のところである。

こどもの母親からの〝いじめ〟にあった。こどもはかわいいが、母親はすこしもかわいくない。しかも、つよい。いまの幼稚園が弱い立場にあることを見すかして、勝手なことを言う。もちろん、〝いじめ〟たりしている自覚はないだろうが、〝いじめ〟はそういう意識の欠如においておこなわれるものである。

もちろん、全部がそういうわけではないけれども、オピニオン・リーダーが、園の〝世論〟を誘導する。なかなか政治的である。

リベラルな考えの持主かと思うと、ひどい保守主義である。これまでしてきたことはよいことだときめている。すこしでも変更すれば、なぜ、変えたか、どうして続けないのか。説明したくらいではわかってくれない。だいたい、新しい園長がやってきたりすること自体が不安だと感じている人たちもいるらしい。新参をすこしいたぶってやろうか、というわけで、ぶつかってくる。母親というもののイメージが変ってしまう。

やたらに行事がある。こどもたちには、なるべく普通の、おちついた、日常を経験してもらいたい。そう思って、行事をへらした。これが母親たち、有力者グループの気に入らない。どうして、へらすのか。幼稚園との信頼関係が崩れる、とおどす声もきこえてくる。

園外へ行って、一晩をすごす〝お泊り保育〟をやめることにしたら、これにいちばん抵抗が大きかった。こどもたちが、あんなに楽しみにしていたのに、それを奪う気か。なんとしても継続せよと要求する。行ったこともないこどもが楽しみにして待ったりするわけがない。親たちが楽しみにして吹き込んだに違いない。そういえば、家庭の主婦は、たえず、どこかへ行きたがっている。よそへ行くのはすばらしいことである。その気持をこどもに移して、外泊保育をやれ、や

れとさけぶ。

中には、この幼稚園へこどもを入れたのは（入れてやったのはという響きをもってきこえる）〝お泊り保育〟があるからだ、などととんでもないことを口走る母親もいた。

なにを、ねぼけたことを言うか、と叱りつけるだけの力をもっていないのが、いまの幼稚園である。母親を敵にまわすわけにはいかない。じっとがまんするしかない。つまり、〝いじめ〟にたえるのである。

現状維持がのぞましいと考える一種の保守主義を無意識に信奉している母親のこどもを預かっている幼稚園は、なにもしないのが、すくなくとも新しいことはなにもしないのが、いちばんということになる。つまらぬことでもいままでしてきたのならよろしい。それをやめるのは、何でも、悪い変化だときめつけてしまう。そういう心情が多くの母親を支配しているらしく思われる。

幼児の教育はこどもの母親の教育である。いわゆる少子化の時代の現実の中で、成人幼児教育への用意のない保育者は、ただ、おろおろするばかりである。さしずめ、私などは、そのあわれな一例だと思っている。

（お茶の水女子大学名誉教授）